

### 紙芝居の保育への導入過程と倉橋惣三の紙芝居関与の再検討

高橋, 洋子

---

(出版者 / Publisher)

法政大学大学院

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大学院紀要 = Bulletin of graduate studies

(巻 / Volume)

87

(開始ページ / Start Page)

73

(終了ページ / End Page)

85

(発行年 / Year)

2021-10-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00024767>

# 紙芝居の保育への導入過程と倉橋惣三の紙芝居関与の再検討

人文科学研究科 日本文学専攻

国際日本学インスティテュート

博士後期課程 3年 高橋洋子

## はじめに

紙芝居は、1935年に刊行された高橋五山の「幼稚園紙芝居シリーズ」によって保育の場に普及していった。高橋五山（1888-1965）の紙芝居の出版活動は、日本の保育の基礎を築いた倉橋惣三と城戸幡太郎の幼児教育に関する動きと時期が一致しており、これらと不可分の関係にあると言える。東京女子高等師範学校附属幼稚園主事の倉橋惣三（1882-1955）は『系統的保育案の実際』を1935年に刊行した<sup>1</sup>。翌36年には保育研究の先駆けとなった法政大学の城戸幡太郎（1893-1985）による保育問題研究会が生まれた。こうした新しい保育思想の動きと時期を同じくして、高橋五山による紙芝居の普及活動は展開されてきた。拙稿「城戸幡太郎の保育問題研究会における高橋五山の紙芝居の役割」（2020）では、高橋五山の幼稚園紙芝居が保育問題研究会で実践活用されて、劇遊びに発展していたことを明らかにした<sup>2</sup>。

倉橋惣三の紙芝居に関する先行研究としては、鬢櫛・種市（2005・2006）があげられる<sup>3</sup>。この論文では保育への紙芝居の導入は倉橋の影響力が大きかったことを論じており、「保育界では倉橋惣三、副島ハマらが草創期から紙芝居の魅力に注目し、保育実践に取り入れていたことを明らかにした」と結論づけているが、倉橋が保育実践に紙芝居を取り入れていた根拠となる具体的な資料が示されていない。また文部省の『保育要領』（1948）に保育教材としての紙芝居の記述があるのには、倉橋の影響があったと述べているが、『保育要領』の保育内容12項目には、人形芝居はあるが紙芝居は入っていないことについては言及されていない。先行研究は<sup>4</sup>、倉橋の紙芝居に関する言説のみに着目して評価しており、倉橋の紙芝居の実践活用についての検討はなされていない。倉橋は人形芝居の普及には力を入れてきたが、紙芝居について実際に活用していたのかについてはあらためて検証する必要がある。

本稿では、保育における紙芝居と人形芝居について、その導入と普及および展開の歴史について検証し、保育現場にそれらがどのように定着していったのか、その実態を明らかにする。そして戦後に文部省が刊行した『保育要領』における紙芝居と人形芝居および劇遊びの位置づけについて分析する。これらの分析を踏まえて、保育における紙芝居の活用経過について再検討することを目的とする。

研究にあたっては、この時期の保育の現場で実際に高橋五山の幼稚園紙芝居がどのような形で浸透していったのか、内山憲尚（1899-1979）の著書や五山の回想を交えながら分析する。次に城戸幡太郎の保育問題研究会での五山の幼稚園紙芝居の活用実態と劇遊びへの展開を示す。さらに倉橋の人形芝居と紙芝居に関する検証を行い、倉橋の『系統的保育案の実際』と内山の『国民保育要義』の著書の検討を通して、両者の紙芝居観の違いを明らかにし、紙芝居と人形芝居および保育問題研究会の成果である劇遊びが戦後の『保育要領』にどのように反映したのかについて分析する。

## 一 幼稚園令の保育項目「談話」について

日本で本格的に幼稚園教育が始まるのは、1876年に文部省によって東京女子師範学校（のち東京女子高等師範学校）附属幼稚園が開設されてからである。以降、幼稚園はこの官立幼稚園をモデルにしながら全国に開設された。1899年に「幼稚園保育及設備規定」が制定され、保育内容は「遊戯・唱歌・談話・手技」の4項目とされた<sup>5</sup>。このうち紙芝居とかかわるのは「談話」であるが、当時からこれは保育の大きな項目となっていた。

幼稚園の急増とともに、大正末の1926年に「幼稚園令」が公布された。同年の「幼稚園令施行規則」において、「観察」を新たに加え、保育内容は「遊戯、唱歌、観察、談話、手技等」の保育5項目が示された。柔軟性をもたせる意味で、保育項目に「等」という字が挿入され、保育内容を工夫してよいことを明らかにした<sup>6</sup>。各幼稚園の保育者の裁量で適宜工夫できる余地を残したことにより、レコード・ラジオ・人形芝居・紙芝居など

も保育で使われるようになった。そのことは「談話」の領域にも広がりをもたらし、人形芝居や紙芝居は保育項目の「談話」を実践する際の教材として取り入れられた。

この1926年の「幼稚園令」の保育5項目の考え方は戦後まで続いたが、1947年の「学校教育法」の制定により、幼稚園が学校教育機関として位置づけられ「幼稚園令」は廃止された。新しい幼稚園制度の実施に伴い保育内容の策定が必要となり、1947年に文部省は「幼児教育内容調査委員会」を設置して翌1948年に『保育要領—幼児教育の手引き—』を刊行した。ここまでの幼稚園に関する条令などを列挙すると、以下のようになる<sup>7</sup>。

- ・1926年（大正15）「幼稚園令」公布
- ・1938年（昭和13）「国家総動員法」公布
- ・1941年（昭和16）「国民学校令」公布（太平洋戦争開始）
- ・1947年（昭和22）「学校教育法」公布（幼稚園令を廃止）
- ・1948年（昭和23）文部省『保育要領—幼児教育の手引き—』刊行

## 二 内山憲尚の保育項目の「談話」観

内山憲尚（憲堂：1899—1979）は大正末から仏教日曜学校運動を推進し、芝増上寺明德学園主事となり、聖美幼稚園を経営した<sup>8</sup>。内山は童話や人形芝居や紙芝居を保育教材に提案しており、児童文化に関わる著作を多く残している<sup>9</sup>。それらの著書の中から、保育項目の「談話」と紙芝居に関わるものを取りあげ、内山の談話観と紙芝居観をみていく。

### 1 『幼児童話の話方と実例』の刊行

内山は『幼児童話の話方と実例』（1935）で、童話を軽視しすぎていることを述べている<sup>10</sup>。しかし、実際には幼児の生活の中には多くの童話が含まれており、幼児は童話を一番喜ぶということ、童話は談話の基礎となり、研究の中心となり、対象となるとその重要性を語っている。また「更に近時幼児保育に取り入れられて来た、人形劇や紙芝居に於ては童話の力が半分以上手伝ふのである」と人形劇や紙芝居にも言及している<sup>11</sup>。この頃、内山は品川区にあった聖美幼稚園園長および中野保母養成所講師（宝仙短大、後に校長）をしていた。この文章からは内山の周辺では紙芝居が保育に取り入れられてきた様子がうかがえる。

### 2 『幼稚園託児所談話法』の刊行と「談話」の捉え方

1940年に内山憲尚著『幼稚園託児所談話法』が出版された。以前に『幼児童話の話方と実例』を出したが、これは童話を主目的として書いたもので、広い意味の「談話」の見地から新しく本書を編んだということが説明されている。内山の談話観は以下の文章に示されている<sup>12</sup>。

談話は幼稚園に於ける保育項目の一にして、言葉を中心としたる独自の立場によつて、保育の重要部面を占めるものである。従来談話に対しては明確なる定義なく、或るものは童話と同一視し、或るものは訓話と混同し、又或るものは童話と全く別個のものゝ如く考へて来た。談話は童話そのものを意味するが如き狭きものにあらず、更に童話と離れたものにもあらず。幼児及び保母が、言葉を以て表現するものゝ内、教育目的達成に適する具体的、組織的なる保育の一つである。

内山はこれまで保育項目の「談話」に対する明確な定義がなく、人によって捉え方が違うことを指摘している。また以下のように述べている。

今日迄、幼児保育上実際に用ひられて来た絵噺、紙芝居、人形劇の如きものはその保育項目中の所属を明らかにされてゐなかつたのであるが、之等のものは当然「談話」の中にも含まる可きものである。

と、紙芝居や人形劇が保育項目「談話」の中に含まれることを明記している。本書には幼稚園での実践に基づいた「談話配当案」(138-148頁)として、談話の一ヶ年の配当案が提示されている。ここに掲載されている「談話」の領域には、童話、行事談、紙芝居、折紙童話、絵噺、玩具童話、影絵芝居、壘人形劇、自由談話、朗読、人形劇が含まれており、それらを組み合わせたものとなっている。

内山の「談話配当案」の特徴として、紙芝居と人形劇が「談話」領域に含まれていることが挙げられる。紙芝居については、そのほとんどが五山の幼稚園紙芝居と仏教紙芝居から採られている。

### 3 保育案『国民保育要義』の刊行

内山は1941年に刊行した『国民保育要義』のなかで、自身の保育案を提案している<sup>13</sup>。談話については「話させる」「聞かせる」「話し合ふ」という三つの方面があることを示している<sup>14</sup>。そして「幼児は想像力が旺盛」であり、「想像力を正しく伸ばしてやることは幼児教育上最も重要」と述べ、内山は保育項目の「談話」の重要性を一貫して主張している。

内山の保育案は、「年中行事を中心とし、総合的に按配し今日迄実際に用ひて来た保育案」と示されている<sup>15</sup>。談話の項目は「花まつり(行)・桃太郎(紙)・花まつりの話(紙)・花咲翁(人)」などの記述があり、行事談、紙芝居、人形劇が使われている。そのほか、童話、折紙童話、絵噺なども組み込まれている。特に紙芝居は第一週から第四週まで、ほぼ毎週取り入れられており、五山の幼稚園紙芝居と仏教紙芝居が全般に渡って使われている。このように内山の保育案においても談話における紙芝居の利用が明らかになった。また紙芝居と人形劇を比較すると、紙芝居は35回、人形劇は7回登場する。紙芝居は人形劇より種類が多く紙芝居の方が圧倒的に多く使われている。なお、内山は戦後の東京都保育連合会(1947)の結成や『保育要領』(1948)の作成にも関わっており、戦後の幼児教育にも影響を与えた。

### 三 内山憲尚による高橋五山の紙芝居の推奨

前述したように、内山は保育項目の「談話」に童話や紙芝居を取り入れることを提唱していた。高橋五山は1935年から世界各国の童話を紙芝居化して「幼稚園紙芝居シリーズ」を出版していくが<sup>16</sup>、翌年から仏教紙芝居も手がけた。内山は「昭和十年四月全甲社から幼稚園紙芝居が出されるについて、社主高橋五山氏に御目にかゝって「仏教紙芝居」の話を持ち出し、翌年三月に「花まつり」を出すことを約した」と述べている<sup>17</sup>。そして1936年、内山が監修者となり五山が制作した特輯『花まつり』が出版された。内山は雑誌や書籍、イベントなどを通して五山の紙芝居を宣伝していた。以下にそのことをみていく。

#### 1 『童話研究』誌上での紙芝居紹介

内山は1922年に結成された日本童話協会の会員となった。日本童話協会は童話の学術的研究を目的とした団体で全国各地に支部を設けていた。初代会長には蘆谷蘆村(重常)が就任し、機関誌『童話研究』(1922年創刊)が発刊された。1936年発行の『童話研究』(16巻2号)をみると内山は常任理事になっている。倉橋惣三、小川未明、岸辺福雄、高島平三郎らが名誉会員となっている<sup>18</sup>。『童話研究』誌上で、高橋五山の仏教紙芝居および幼稚園紙芝居がたびたび宣伝されているのは、内山憲尚とのつながりによる。

16巻5号(1936年)には仏教紙芝居『花まつり』の刊行案内と「日曜学校やこども会にひろく活用されんことを望む」と全甲社の仏教紙芝居の宣伝がされている。16巻7号(1936年)には幼稚園紙芝居『大國主命と白兔』、17巻2号(1937年)には仏教紙芝居『お釈迦様と鳩』、17巻10号(1937年)には仏教紙芝居『聖徳太子様』、そして20巻10号(1940年)には特輯紙芝居『良寛さん』といった五山作品が紹介されている。さらに17巻8号(1937年)には、幼児童話研究会の例会が東京の入谷幼稚園で開かれたことが記されている。五山の幼稚園紙芝居『お猿と眼鏡』(1936)が実演された<sup>19</sup>。これに続いて、内山憲尚の「紙芝居と保育」と題する講演があった。出席者は幼稚園関係者を含む19名で、その中には高橋五山と砥上種樹が出席していた。なお、砥上種樹は1938年設立の日本教育紙芝居協会に参加した。

一方、20巻8号(1940年)には、建部光磨子爵を会長とし、内山憲尚を委員長とする大日本紙芝居研究会の発会式が7月7日に伝通会館で挙行されたことが掲載されている。発会式では常任委員の高橋五山が開会の辞

を述べており、同研究会の事務所の住所は五山の全甲社と同一である。これらのことから、内山と五山が中心となって大日本紙芝居研究会を結成したと考えられる。同研究会の発会式では紙芝居の実演が行われ、保育紙芝居は本所幼稚園保母の吉川澄江、仏教紙芝居は仏教童話会理事の山田巖雄が実演者となっている。実演された紙芝居のタイトルは記されていないが、開会の辞を述べた五山の紙芝居が用いられたと推察される。

以上のように、日本童話協会では紙芝居の実演や研究が行われ、五山の紙芝居が極めて重要視されていた。さらに、これと関連して1940年には内山を委員長とする大日本紙芝居研究会が組織された。

内山の「紙芝居の高橋五山」という文章によれば、「現場の声を作品に反映し実際に役立つものを作りたいという熱意から、実際に話すものや幼稚園の先生たちを交えて、「教育紙芝居研究会」を作って、毎月一回小石川の伝通会館で研究会を開いた」という<sup>20</sup>。

## 2 日比谷公園での『花まつり』の上演

1937年4月、東京総合花まつり大会が日比谷公園音楽堂で举行された。前年に出版された高橋五山の仏教紙芝居『花まつり』(1936)が拡大版となり、内山憲尚によって実演された<sup>21</sup>。このイベントの予告記事や当日の上演の様子が新聞紙上で紹介された<sup>22</sup>。日比谷公園での『花まつり』の上演は、五山の紙芝居が広く認知される契機となり、その普及においても大いに貢献するものだったと考えられる。

このイベントから間を置かず、内山の『紙芝居の教育的研究』(1937)および『紙芝居精義』(1939)が刊行された。これらの本には日比谷公園音楽堂で用いられた拡大版『花まつり』が写真付きで掲載されている<sup>23</sup>。

## 3 『紙芝居の教育的研究』の刊行

現在の絵を一枚ずつ引き抜いて見せる形式の紙芝居が誕生したのは1930年で、その第一作は『魔法の御殿』(後藤時蔵作、永松武雄画)であった。さらに同年、鈴木一郎作、永松武雄の絵による『黄金バット』が登場し、紙芝居ブームが起きた。一方で、その残忍で卑わいな内容に対して次第に非難の声も大きくなった。このような背景の中で、内山の『紙芝居の教育的研究』(1937)は出版された。序文には、次のような文章が掲げられている<sup>24</sup>。

この紙芝居に対して一般父兄や教育者たちは全く無知識、無理解であります。「紙芝居」に批判を下す場合にも紙芝居を知らずして之をなし、これを論じてゐる様であります。この児童大衆に強い魅力をも有する紙芝居の姿を正しく知り、且これを教育に取り入れるまでの用意がほしいと考へます。私たちは、こゝに紙芝居に対して、公平な立場から、ありのままの姿を示して見たのであります。

と、紙芝居に無知識、無理解の一般父兄や教育者に対して、先入観で批判したり論じたりするのではなく、まずは紙芝居の姿を正しく知れ、と呼びかけている。

本書では、特に「幼稚園や日曜学校に於いては教室より以上に自由に取り入れることが出来るから、大に利用して貰ひたい」と記されている。さらに「私の幼稚園では人形芝居でも紙芝居でも幼児から進んでやる」と述べており、幼児が紙芝居に馴染んでいる様子が伝わる<sup>25</sup>。内山は「教育を生活化せよ、多角化せよ、児童の生活圏内にあるあらゆるものを教育に取り入れよ」と熱く論じており、「紙芝居もその内の一つとして生かして教育に役立たせたら、いくらでも利用法がある」と言い切っている。本書の「紙芝居の教育的応用の実際」という項目には、五山の幼稚園紙芝居と仏教紙芝居が紹介されている<sup>26</sup>。

はやくも1939年には、この本を改訂再録した内山憲尚著『紙芝居精義』が刊行された。凡例に「時正に非常時局に際会し、物資思ふに任せず」と記されている。そんな状況においても、内山は紙芝居の歴史を伝え、紙芝居の活用を訴えたかったのだろう。この本は『紙芝居の教育的研究』(1937)と重なる記述が多いが、附録として、五山の仏教紙芝居『お釈迦様と鳩』の全16場面と脚本が掲載されている<sup>27</sup>。

## 4 保育における人形芝居と紙芝居の関係

内山は『紙芝居の教育的研究』および『紙芝居精義』のなかで、幼稚園では人形芝居が紙芝居よりも先行し

ていたと述べ、五山の幼稚園紙芝居についても次のようにコメントしている<sup>28</sup>。

幼稚園に於ては昭和四五年頃から指遣人形芝居（ギニョール）が可成り盛んに保育に取り入れられる様になった。フレーベルからは人形と舞台とが売り出され、昭和五年には女高師の先生方によつて人形劇の脚本さへも出される様になった。紙芝居も街頭に於てその全盛を誇つてゐる昭和六七年頃にはすでに私の知つてゐる二三の幼稚園では試みられてゐたこともあつた。一般的に製作せられたのは、全甲社の「幼稚園紙芝居」である。

内山が述べているように、「二三の幼稚園」で紙芝居を手作りしようという試みはあつたようだ。しかし、出版紙芝居は登場しておらず、「一般的に製作」され教育現場で広く活用されるのは、全甲社の幼稚園紙芝居の登場を待つことになる<sup>29</sup>。

#### 四 保育現場への紙芝居の普及

保育現場での紙芝居の活用を決定づけたのは、前述のように高橋五山の「幼稚園紙芝居シリーズ」である。同シリーズは日本で最初に出版された保育紙芝居として全国に同時配給された。同じく紙芝居草創期の功労者として知られる、今井よね（1897－1968）の紙芝居活動は、1933年にはじまっていたが、キリスト教の布教を主眼とし、聖書の物語を紙芝居化したもので、保育現場への導入を図つたものではなかった<sup>30</sup>。

##### 1 東京女子高等師範学校附属幼稚園の紙芝居導入の苦心

五山によると、東京市内の幼稚園や保育所については外交員を雇って戸別訪問して紙芝居を販売していたが、「私の園では、良家のお子さまばかりお預かりしていますからねえ」と辛辣に言われ、玄関払いされたという<sup>31</sup>。五山の日記などから、これは東京女子高等師範学校附属幼稚園に紙芝居を導入しようとした際に言われた言葉ではないかと推察される<sup>32</sup>。1932年頃、街頭紙芝居が子どもの心を捉えるにつれ、一般父兄や教育者の非難の声も大きくなった<sup>33</sup>。五山は「私は率直にいうと、その頃の街の紙芝居についてはあまり知識をもつていなかった。しかも、有識者の言葉に熱心に耳を傾けた」と述べている<sup>34</sup>。

紙芝居の改善は容易ではなく、それに代わる作品を創り出すこともできなかった状況のなかで、五山は自ら絵本などの児童出版物を手がけていたこと、画家でもあつたことから、紙芝居の出版に着手したのである。

##### 2 幼稚園紙芝居と仏教紙芝居の出版

1935年4月、「幼稚園紙芝居シリーズ」第一輯『赤頭巾ちゃん』が五山の全甲社から創刊された<sup>35</sup>。五山は1937年10月に「幼稚園紙芝居シリーズ」第一期10巻の出版を完了し、続けて翌1938年に第二期の出版をスタートさせた。五山の幼稚園紙芝居はこの頃までには全国に普及した。五山は自ら文部省に出かけて全国の幼稚園名簿を、さらに寺院名簿を入手し、実物見本一枚と第一期の刊行目録と趣意書を送付し、紙芝居の普及を図つた<sup>36</sup>。そして「己をしかり励まし、むちうつて、やつと、三つのお正月を迎えるころ」に、紙芝居を全国に行き渡らせることができた、と記している<sup>37</sup>。1938年には国家総動員法が公布されるなど戦時体制に入りつつある社会状況であつたが、この頃は「幼稚園紙芝居シリーズ」の出版がかなり進んで全国に届けられていたのである。1939年には『ピーター兔』が再版されて、『おむすびころりん』は1939年の二版と1941年の三版まで確認される<sup>38</sup>。これらのことから保育現場に幼稚園紙芝居の普及が図られたことがうかがえる。

このように順調に出版が行われたのは、五山が幼稚園紙芝居に加えて、仏教界という後ろ盾のある仏教紙芝居を手がけたことが後押しになつたと考えられる。1928年に仏教保育を推進するための全国組織として日本仏教保育協会が設立され<sup>39</sup>、兵庫県の西光寺や福島県の如来寺のように<sup>40</sup>、寺院が経営母体の幼稚園や保育園が全国に多く存在していたからである。

##### 3 全国の幼稚園での幼稚園紙芝居の利用

五山の幼稚園紙芝居の活用実態に関しては、はやい段階では東京都千代田区にあつた千桜幼稚園の1936年5

月9日の保育日誌に『三匹の子豚』が演じられた記述がある<sup>41</sup>。千代田区内では紙芝居を早期に受容しており、芳林幼稚園の『三匹の子豚』はセロテープで修復して何度も使用した形跡があり、各幼稚園へ貸し出されていた可能性もあるという<sup>42</sup>。

兵庫県の敬愛幼稚園では、五山の幼稚園紙芝居を第一輯から続けて購入していたことが確認される。同幼稚園の1938年度および1939年度の「保育日誌」においては、幼稚園紙芝居が談話教材として使用されていたことが判明した<sup>43</sup>。現在ある幼稚園では井草幼稚園（東京）、清心幼稚園（群馬）、竹中幼稚園（岡山）などに五山の幼稚園紙芝居が多数所蔵されており、刊行されるたびに購入されていたことがうかがえる<sup>44</sup>。

一方、五山とは別派の日本教育紙芝居協会が設立されたのは1938年である。同協会は設立一年後にスポンサー付きの紙芝居を出版するようになり<sup>45</sup>、朝日新聞社の出資による日本教育画劇と業務提携して1940年ころから紙芝居出版が本格化していくが、五山の紙芝居出版活動と比較すると、かなり遅いスタートであった。同協会の保育向けの紙芝居は、『キシヤゴッコ』『カクレンボ』（1941）といった創作ものが主だった。これに先駆けて五山の幼稚園紙芝居が保育現場への定着を図ることができたのは、世界各国の童話を紙芝居化した出版であること、戦時体制に組み込まれる前の1937年には第一期の出版を完了していたことが影響していると考えられる。

## 五 保育問題研究会での高橋五山の紙芝居活用

1936（昭和11）年、城戸幡太郎を会長として保育問題研究会が設立された。保育問題研究会は、幼稚園、託児所の域を超えて、研究者と保育者とが一緒になって保育の実践と理論を拓こうという画期的な研究スタイルで発足した。「言語」の領域では、言語訓練、言語矯正、童話、紙芝居、人形芝居等が研究されていた。

### 1 幼稚園紙芝居との関係

保育問題研究会には、五山が幼稚園紙芝居をスタートする際に『赤頭巾ちゃん』の原画を貸し出した十文字幼稚園の留岡よし子が設立当初から参加していた<sup>46</sup>。留岡は「子供がせがむにまかせ一日に二回、三回と上演したが飽くことを知らない」と、五山に報告している<sup>47</sup>。拙稿「城戸幡太郎の保育研究会における高橋五山の役割」

（2020）で明らかにしたように、『保育問題研究』誌において五山の幼稚園紙芝居の利用が確認された<sup>48</sup>。それは、五山が留岡よし子に紙芝居の原画を貸し出したことに起因すると考えられる。

『保育問題研究』4巻8号（1940年9月）には、同研究会の実験的施設であった戸越保育所における劇遊びの実践報告が掲載されている。そこには「全社員の紙芝居で子供達におなじみなお話」である『三匹の子豚』の上演を「何回も何回もやって見せたら、いつの間にか子供達の遊びの中にしみこんで“オホカミゴッコ”と云ふ遊びがはやり出した」と、紙芝居から劇遊びに展開した経緯が伝えられている。穴戸健夫（2007）は「当時、劇づくりの保育実践は一般的にほとんど行われておらず」、東京女子高等師範学校附属幼稚園においても「人形劇を鑑賞させることはあっても、劇づくりへのとりくみは実践されていない」と述べている<sup>49</sup>。『三匹の子豚』（1936）の紙芝居は五山の「幼稚園紙芝居シリーズ」の中でも人気作品の一つであった。

また4巻3号（1940年4月）研究会報告には、内山憲尚による「談話について」の講座があったことが掲載されており、「言語訓練としての談話の取扱ひに就て充分の研究を進めて来なかつたので、この講座を機会として大いに検討されなくてはならない」といった記述がある<sup>50</sup>。保育問題研究会における高橋五山の紙芝居活用は以下のとおり。【表1】

【表1】 保育問題研究会における高橋五山の紙芝居活用

巻号	場所	高橋五山の幼稚園紙芝居の作品名
3巻2号（1939）	山村での上演	『三匹の子豚』（1936）
3巻7号（1939）	戸越保育所	『ピーター兔』（1938）
4巻3号（1940）	戸越保育所	『三匹の子豚』（1936）・『おむすびころりん』（1938）
4巻8号（1940）	戸越保育所	『三匹の子豚』（1936）・『七匹の小山羊』（1939）

## 2 保育問題研究会と教育紙芝居の合流点

『保育問題研究』1巻2号(1937年11月)掲載の新入会員名簿には、童話作家の川崎大治と小学校教師の松永健哉の名がある<sup>51</sup>。高橋五山、留岡よし子、川崎大治、松永健哉、それぞれの動機は異なるが、共通点は教育紙芝居を推進していた人たちであるということである。その合流点が、幼稚園、託児所の域を超えて庶民の子どもたちの生活に目を向けることを重視していた保育問題研究会であった。【表2】

松永健哉は日本教育紙芝居連盟(1937年4月設立)を結成し、生活綴り方教育に携わる教師たちをメンバーとして活動していた。さらにこの連盟を母体として1938年7月には、松永を先導者に日本教育紙芝居協会が設立された。ここに川崎大治も参加した。松永の紙芝居は自作紙芝居からはじまり研究対象は小学生が主であったが、日本教育紙芝居協会では幼児から大人へと対象範囲が広がり、理事として倉橋惣三も名を連ねた。同協会の保育向け紙芝居については川崎大治が中心となって活動した<sup>52</sup>。第一輯は1940年度農繁季節保育所用保育紙芝居第一輯(6部1組)として印刷紙芝居を製作し特別頒布した<sup>53</sup>。これは1935年に五山が幼稚園紙芝居をスタートさせてから5年後のことであった。

## 六 倉橋惣三の保育案と「談話」観および紙芝居観

日本の保育会の指導者であった倉橋惣三(1882-1955)は、1923年に東京女子高等師範学校附属幼稚園(以下、附属幼稚園)の保母たちと共に「お茶の水人形座」を立ち上げ、幼稚園教育に人形芝居の導入を試みていた。1930年には幼稚園談話会にて倉橋による人形劇の解説と実演の講習会が行われるなど、この頃から倉橋が人形劇の普及に力を入れていったことがうかがえる<sup>54</sup>。一方、1930年という年は、街頭では紙の切り抜き人形を串にさした立絵から平絵の紙芝居に移行した時期であった。

ここでは倉橋惣三の談話観と紙芝居観、そして保育案についてみていく。

### 1 東京女子高等師範学校附属幼稚園の人形芝居の導入

1932年1月8日付朝日新聞紙上で、倉橋は「子どもの情操教育には平面的な紙芝居より立体的な動きをする人形芝居がいい」と述べている。同年5月20日付朝日新聞家庭欄では「街の可憐な芸術、紙芝居を問題にする」と紙芝居の特集が組まれたが、倉橋は「街頭紙芝居は実演がきわめて容易で、そのストーリーも勝手に、低級、卑わい、残忍で、芸術味がない」と人形芝居と比較して街頭紙芝居の低俗さを非難していた。

一方、附属幼稚園の保育者、菊池ふじのは、1932年の「人形に依る「おはなし」の演出に就て」という講演のなかで次のように語っている<sup>55</sup>。

世間ではよく紙芝居と、人形芝居とを同じものと心得てる人が多うございます。子供達もよく、舞台を持ち出しますと、紙芝居！紙芝居！とふれ歩いて居りますが、こんな時私共は、「紙芝居じゃないの、人形芝居よ」と訂正いたす事もちよいちよいございます。皆様も御存じの様に、紙芝居は、仮に内容を教育的な良いものと仮定いたしましたところで、絵ばなしの一寸動くと言つた様のものでございまして、説明的な意義は持つて居りませうが、少しも芸術的ではないと思ひます。之に反して人形芝居は、動的であり芸術的であると思ひます。

このように、五山が幼児教育に紙芝居を導入する以前に、倉橋をはじめ附属幼稚園では、人形芝居については高く評価していた一方、紙芝居に対して批判的な見方をしていた。

### 2 『系統的保育案の実際』と倉橋惣三の紙芝居観

1935年、倉橋惣三が附属幼稚園の保母らと共に作り上げた『系統的保育案の実際』が出版された。これは倉橋の保育理論を保育案に具体化したもので、子どもの自発的な活動が重んじられた。保育5項目は「課程保育案」の中に「唱歌・遊戯・談話・観察・手技」と位置づけられた<sup>56</sup>。「談話」に使用されるものには、童話(昔話、創作話、歴史話、偉人話)、時事話、観察話、詩の吟誦、人形芝居、幼児演出などが掲載されている。また、これらの談話の材料は、自由遊戯、観察、誘導保育にも使用されている。しかし、紙芝居の記述は、この保育



案には一切みられない。

そして1941年に『改訂版 系統的保育案の実際』が発行された。改訂版は時局の変化に対応した保育内容の刷新を企図したものであり、「材料の選択と配当の適切さに考慮を加へ、解説の筆をも新たにし、面目一新を以て此の改訂版を刊行することとした」と記されている。しかしながら、この改訂版でも「談話」項目に紙芝居は組み込まれておらず、序文の解説にも紙芝居についての記述はない。さらに「談話」の解説を担当した新庄よし子の文章にも紙芝居について何も記されていない<sup>57</sup>。

こうした指摘はすでに中村悦子(1995)が行っている。中村は「本案においても、また新庄よし子の論においても、その後多くの園で利用されるラジオの視聴、紙芝居は教材としては取りあげられてはいない」と述べている<sup>58</sup>。いずれにしても、『改訂版 系統的保育案の実際』(1941)が発行された頃は、多くの幼稚園で紙芝居の利用がなされていた。それにもかかわらず、倉橋の保育案には紙芝居は一度も取りあげられておらず、解説にも全く記述されていない。加えて、倉橋は1938年に設立された日本教育紙芝居協会の理事になっていたが、このような背景がありながらも、1941年の『改訂版 系統的保育案の実際』に紙芝居が取り入れられることはなかったのである。日本教育紙芝居協会の機関誌『教育紙芝居』(1938創刊、1942年『紙芝居』に改題)においても、倉橋が紙芝居を保育で使った記述はみられず、保育項目の「談話」に紙芝居を位置づけようとする姿勢は見出せない。

先述した内山の『国民保育要義』の保育案と比較すると、両者の紙芝居の扱いが全く異なることが浮かび上がってくる。内山の『国民保育要義』は『改訂版 系統的保育案の実際』と同じ年に出版されているが、内山は紙芝居を推奨し、倉橋は紙芝居を軽視していたといえよう。そして、倉橋の附属幼稚園においては、紙芝居の価値を見出すことができないまま、黙殺していたと言わざるを得ない。

先行研究では<sup>59</sup>、倉橋が草創期から紙芝居の魅力に注目し保育実践にとりいれてきた、倉橋が紙芝居の教育効果を唱え、教育現場での活用を推奨してきた、倉橋が『保育要領』のなかに紙芝居を位置づけたなど、倉橋が保育における紙芝居に多大な貢献をしたかのような評価があるが、そのような解釈があてはまらないことは明らかである。

### 3 東京女子高等師範学校附属幼稚園の上遠文子による紙芝居観

東京女子高等師範学校附属幼稚園の保育者の上遠文子は、1944年9月、「幼児と紙芝居」という以下のような文章を残している<sup>60</sup>。

幼児は談話を好むと同様、談話を絵にし話にした紙芝居は特に幼児に好感を持たれる。私共としても自由遊びに飽易い年少組の保育案に紙芝居を折込むのは一つの考案として用ひてゐる・・・数年前、街巷で見た紙芝居の印象の深い私共はともすると紙芝居は品の無もの、あまり教育的で無ものとの感を抱いてゐたが、今では大いに活用してゐる自分である・・・過日、私の組(年少組)の男子の自由遊びに大狼ごっこがはやり始めた・・・これと云ふのもその二三日「三匹の小豚」の紙芝居をした・・・空襲を受け壕の中に数時間過さねばならぬ折・・・紙芝居もよりよき資料であるゆゑ避難用具の一つに加へて用意しておきたい・・・此頃では何かと紙芝居を資料として活用してゐる私である。そして数年前の悪印象の紙芝居も自分で破棄した。(「…」中略)

と、数年前まで紙芝居に対して悪いイメージを持っていたことを述べている。注目すべき点は、戸越保育所と同様に「三匹の子豚」の紙芝居が劇化されていたことである<sup>61</sup>。戦時下においては幼稚園と託児所の差はほとんどなくなっていた。戦時下において、紙芝居は子ども達を引き止めておく唯一の策でもあった<sup>62</sup>。上遠の文章からは、附属幼稚園では、空襲を受けるような状況になってから、はじめて紙芝居が取り入れられたことがうかがえる。

## 七 「保育要領」における紙芝居の位置づけ

戦後すぐの幼児教育に大きな影響を与えたのが、1948年に文部省が作成した『保育要領—幼児教育の手引き—』(以下『保育要領』)である。前年の1947年2月から文部省に幼児教育調査委員会が設置され、占領軍初等教育担当者として来日していたヘレン・ヘファナンの指導のもとに、倉橋惣三、副島ハマ、山下俊郎、三木安正、内山憲尚、坂元彦太郎などが委員となり保育要領の案を作成した<sup>63</sup>。従来の保育項目5項を広範囲に改め、12項目の保育内容とした。そして「談話」は「お話」に改称された。新たな保育内容は「見学」「リズム」「休息」「自由遊び」「音楽」「お話」「絵画」「製作」「自然観察」「ごっこ遊び・劇遊び・人形芝居」「健康保育」「年中行事」の順に12項目が掲げられている<sup>64</sup>。ここに紙芝居は入っていない。紙芝居の記述があるのは、わずかに「幼児の一日の生活」や「休息」「健康保育」の項目に遊びの一例として記されているだけである。「お話」の項目をみても「童話・おとぎ話・詩などを聞かせてやる」とあるが、ここにも紙芝居の記述はない。

委員に加わった内山憲尚は、これまでの「談話」から「お話」への名称変更の経緯とその内容について、次のように説明している<sup>65</sup>。内山によれば、ストーリーを「談話」ではなく「お話」と訳しただけで、「内容に於てはちがいが無い」と考えてよい。但し、「従来談話の中に包含されていた、人形芝居が、別に取り出されて、一つの項目を作ったと云うこと、即ちお話と別個に人形芝居が取り扱われる点だけは以前とちがっている」と述べている。そして、お話は「広範囲に於て新しい生命を持つもの」であって、「童話と紙芝居のみをもって「お話」と考えていた従来の認識を根底から更めて貰はねばならない」と説明している。保育カリキュラムの中に盛り込まれるものは「限度があつて、童話、紙芝居、朗読、生活発表、行事談、謎等にすぎないだろうが、これ以外に、朝の挨拶から食後の雑談に至るまで、すべてが「お話」であると考へなければならぬ」ということである。

前述したように、内山は「談話」(お話)の意義と重要性について、特に童話と紙芝居を取りあげて、著作や講演を通して主張してきた。そのことは、「童話と紙芝居のみをもって「お話」と考えていた従来の認識を根底から更めて貰はねばならない」という文章にあらわれている。内山はこの説明文でも「お話こそは保育の重要部面を占めるものである」と締めくくっており、その思いは一貫していた。しかし、内山の説明文では、なぜ人形芝居だけが別個に取り扱われるようになったのかについては触れていない。内山の文末には「読書」という小話が掲載されており、「更めて選択しなくてもいゝことを標準にしますのよ」という言葉で終わる。したがって、すべてがお話ということになる。とすると、人形芝居も「お話」に包含されるということになる。

小山(2011)の研究では、これまでの保育項目の「談話」は、戦後に「お話」と「人形芝居・劇遊び」という新たな内容に変容していったことを指摘している<sup>66</sup>。では、なぜ人形芝居と劇遊びは別個に扱われて、紙芝居は12項目に加えられなかったのか。まず、保育内容12項目に人形芝居はあつて紙芝居がないのは、倉橋の意向が反映している可能性が考えられる。倉橋の『系統的保育案の実際』(1935・1941)でも、多くの園で利用されていた紙芝居は入っていなかったからである。そして「劇あそび」が12項目の一つに入ったのは、城戸幡太郎の保育問題研究会における紙芝居『三匹の子豚』にみられる劇化の成果が反映していると考えられる。委員会に参加した山下俊郎、三木安正、副島ハマは保育問題研究会のメンバーであつた<sup>67</sup>。さらに加藤(2016)の研究によって海卓子も委員に加わつていたことが明らかになった<sup>68</sup>。また、山村きよは、1949年の全国保育連合会新潟大会で、劇遊びについて研究発表を行つており<sup>69</sup>、東京都保育会文化部編集『劇遊び脚本』(1949)という本も手がけている<sup>70</sup>。海卓子と山村きよは保育問題研究会設立当初から参加していた。以上のことから、保育問題研究会の先駆的な活動は戦後の『保育要領』にいかすことができたといえる。『保育要領』の「劇遊び(お話遊び)」の項目には以下のような記述がある。

たとえば、三匹の子ぶたの話を知ると、これを直ちに遊びにする。大きい男の子はおおかみになり、小さい子はそれぞれ三匹の子ぶたになって、話で聞いた筋を興味深く再現しようとする。ちょっとした指導によって、少しの組織とヒントとを与えてやると、おもしろい劇化されたお話の遊びができるものである。

と、「三匹の子豚」の例が示されている。これは保育問題研究会の戸越保育所において、五山の紙芝居『三匹の子豚』を使った劇遊びの成果を想起させる。保育問題研究会の先駆的な活動は戦後にまでつながつていったこ

とがみえてくる。またこの文章には「お話の遊び」という記述があり、劇遊びも「お話」に包含されるものと解釈できる。それを敢えて『保育要領』の中で目立つように掲げたのは、これまでの成果を『保育要領』で強調したかったからではないかと推察する。倉橋は人形芝居を保育教材として定着させ、保育問題研究会は劇遊びという成果を生み出した、という思いが『保育要領』にあらわれていると考える。

## 八 「幼稚園要領」における紙芝居の位置づけ

その後、文部省は『保育要領』を改訂し、1956年に国が示す幼稚園の教育課程の基準として『幼稚園教育要領』を刊行した。ここに、保育内容については「健康」「社会」「自然」「言語」「音楽リズム」「絵画製作」の6領域が定められた。内山と五山の思いが届いたのはこの『幼稚園教育要領』においてである。言語の中に「絵本・紙しばい・劇・幻燈・映画などを楽しむ」と明記されたからである<sup>71</sup>。さらに1964年に改訂された『幼稚園教育要領』には「絵本、紙しばいなどに親しみ、想像力を豊かにする」と示された<sup>72</sup>。『保育要領』では言語領域の「お話」に紙芝居の記述はなかったが、『幼稚園教育要領』では「言語」の中に紙芝居が示されたのである。一方、人形芝居に関しては、1956年の『幼稚園教育要領』の小項目に「紙芝居や人形しばいをしたり、見たりする」と記述があるものの、1964年の『幼稚園教育要領』以降、記述はみられない。1989年の『幼稚園教育要領』では「絵本や物語に親しみ」となり、紙芝居は物語に置き換えられて、現在に至っている。

## おわりに

本研究では、主に保育における「談話」の解釈の変容について、紙芝居を中心に人形芝居と劇遊びを加えて歴史的経過の中で分析した。戦前から戦後にかけての保育実践に紙芝居が取り入れられたのは、内山憲尚および高橋五山、城戸幡太郎の保育問題研究会の努力によるところが大きいと言える<sup>73</sup>。

倉橋が日本の幼児教育に多大な貢献をしたことは周知の事実であるが、紙芝居においては自らの幼稚園で活用しようという理解には至らなかった。全国の幼稚園で利用されてきた紙芝居だが、彼の所属する東京女子高等師範学校附属幼稚園では紙芝居ではなく人形芝居が取り入れられた。その附属幼稚園では戦時体制になるまで紙芝居の活用はみられなかった。紙芝居は保育現場で談話教材としての役割を担っていたが、倉橋の影響で1948年の『保育要領』で重要な項目として位置づけられたのは人形芝居であった。

一方、城戸幡太郎の保育問題研究会では、はやくから高橋五山の幼稚園紙芝居が利用されて、劇遊びに発展するまでになった。さらにその取り組みは戦後の『保育要領』の保育項目に「劇遊び」として実を結んだ。城戸幡太郎は、「紙芝居が人形芝居と違うのは、変化する事件の場面を絵画によって表現することで、そのために語り手はその場面の变化を説明しなければならない。この説明に、紙芝居の独特な教育的意義がみとめられるのである」と紙芝居の教育性を言い表している<sup>74</sup>。このような紙芝居ならではの独自性が魅力となって今日まで引き継がれているのであろう。

キーワード： 紙芝居，倉橋惣三，高橋五山，内山憲尚，城戸幡太郎

【表2】 高橋五山・内山憲尚・城戸幡太郎の研究会・倉橋惣三の紙芝居関与と出版活動

	高橋五山	内山憲尚（憲堂）	城戸幡太郎の研究会	倉橋惣三と保育者
1935 昭10	幼稚園紙芝居第一期 10巻出版開始	『幼児童話の話方と実例』 出版	留岡よし子『赤頭巾ちゃん』実演	『系統的保育案の実際』出版
1936 昭11	仏教紙芝居出版開始 7輯『三匹の子豚』	高橋五山の仏教紙芝居『花まつり』の監修	保育問題研究会発足 留岡よし子が参加	
1937 昭12	拡大版『花まつり』日比谷公園で上演される	『紙芝居の教育的研究』 『花まつり』実演	『保育問題研究』発行	
1938 昭13	幼稚園紙芝居第二期『ピーター兔』出版『三匹の子豚』再版	高橋五山の仏教紙芝居 3輯『成道のお話』作・監修	会員の松永健哉が「日本教育紙芝居協会」設立、川崎大治も参加	倉橋は「日本教育紙芝居協会」の理事となる
1939 昭14	15輯『七匹の小山羊』	『紙芝居精義』出版	五山の『三匹の子豚』 『ピーター兔』等上演	
1940 昭15	『ハンスのたから』 大日本紙芝居研究会	『幼稚園託児所談話法』 大日本紙芝居研究会	五山の『三匹の子豚』 『七匹の小山羊』劇化	
1941 昭16	『おむすびころりん』 3版発行	『国民保育要義』出版		『改訂版 系統的保育案の実際』出版
1944 昭19	「貼紙紙芝居の作り方」 発表			保母、上遠文子「紙芝居と幼児」発表
1947 昭22	43年刊行『鬼のツリハシ』がペープサート化	東京都保育連合会の中心的推進者		
1948 昭23	紙芝居『てんからおだんご』等GHQの検閲	『保育要領』関与	保育問題研究会の会員 『保育要領』関与	倉橋『保育要領』関与
1949 昭24	全甲社より「保育紙芝居シリーズ」出版開始	「保育要領に於ける「お話」の解釋」発表	東京都保育会文化部『劇遊び脚本』出版	

1 東京女子高等師範学校附属幼稚園編『系統的保育案の実際』日本幼稚園協会、1935年

2 拙稿「城戸幡太郎の保育問題研究会における高橋五山の紙芝居の役割」『法政大学大学院紀要』84号、2020年、29-35頁。上地ちづ子『紙芝居の歴史』（久山社、1997年、52頁）は高橋五山と城戸幡太郎の保育問題研究会との交流は見出せないとしている。

3 鬘櫛久美子・種市淳子「保育におけるメディアとしての紙芝居—紙芝居通史を中心に」『名古屋柳城短期大学研究紀要』27、2005年、53-67頁。鬘櫛・種市「保育のなかの紙芝居—倉橋惣三と「紙芝居」の関わりを中心に」同紀要28、2006年、95-105頁。鬘櫛「幼児教育・保育の先達と紙芝居」『子どもの文化』428号、2007年、17-27頁。

4 鬘櫛・種市（注3）。三澤裕美子「倉橋惣三と教育紙芝居の関わりについての考察—雑誌『教育紙芝居』・『紙芝居』から探る」『有明教育芸術短期大学紀要』9、2018、155-166頁

5 文部省『幼稚園教育百年史』ひかりのくに、1979年、27頁

6 文部省『幼稚園教育百年史』（注5）、28頁

7 文部省『幼稚園教育百年史』（注5）、年表（457-478頁）より。

8 鶴見大学図書館『内山文庫目録』（1982）の年譜より。品川区の聖美幼稚園（1925年設立の有隣幼稚園が前身、1934年に名称変更）は2004年3月31日閉園。品川区役所に確認（2021年4月22）。

9 内山憲尚『仏教童話とその活用』（興教書院、1941年）も出版。内山は1924年より増上寺託児所（明德幼稚園）で人形劇をはじめた。「子供の人形座」結成など人形劇の普及にも貢献した（齊藤尚子「保育における人形劇の史的検討Ⅱ—内山憲尚による人形劇団の創設と普及活動」『東京家政大学研究紀要』（30）1990年、73-80頁）。「東京都保育連合会」（1947年6月）結成の中心的推進者であった。（『日本の保育の歴史』萌文書林、2017年、275頁）。

10 内山憲堂『幼児童話の話方と実例』東洋図書、1935年、216頁

11 内山憲堂『幼児童話の話方と実例』（注10）、214頁

12 内山憲尚『幼稚園託児所談話法』東洋図書、1940年、2・6頁

- 13 内山憲尚『国民保育要義』東洋図書、1941年、保育案は296-318頁に掲載。
- 14 内山憲尚『国民保育要義』(注13)、180-181頁
- 15 内山憲尚『国民保育要義』(注13)、296頁
- 16 高橋洋子編著『教育紙芝居集成 高橋五山と幼稚園紙芝居』国書刊行会、2016年
- 17 内山憲尚・野村正二『紙芝居の教育的研究』玄林社、1937年、99頁。内山憲尚『紙芝居精義』東洋図書、1939年、128頁にも同じ文章掲載。高橋五山も「私が紙芝居をはじめると、いち早く内山憲尚さんが訪ねて来てくださった」と述べている(『せいくらべ』2号、紙芝居作家協会、1960年、5頁)。
- 18 日本童話協会機関誌『童話研究』16巻2号、1936年、58頁
- 19 『童話研究』17巻8号、1937年、64-65頁
- 20 内山憲尚「紙芝居の高橋五山」『児童文芸』10巻3号、日本児童文芸家協会、1965年、13-15頁。しかし、「この会は戦争が苛烈になってきて、昭和16年に休会せざるを得なくなった」という。
- 21 拙稿「「花まつり」の命名とその発展—高橋五山の紙芝居の寄与」『国際日本学論叢』17号、2020年、1-49頁、「高橋五山の紙芝居『花まつり』(1936)の演出上の工夫と仏教美術受容」『国際日本学論叢』18号、2021年、1-29頁参照。
- 22 朝日新聞「花御輿の新宿進出と日本一の大紙芝居“花まつり”プラン決る」(1937年3月30日東京朝刊)、「けふ“花まつり”日比谷公園の賑ひ」(4月8日朝刊)など。
- 23 内山憲堂・野村正二『紙芝居の教育的研究』(注17)、写真(頁なし)。内山『紙芝居精義』(注17)、52頁に写真掲載。
- 24 内山憲堂・野村正二『紙芝居の教育的研究』(注17)、序2-3頁
- 25 内山憲堂・野村正二『紙芝居の教育的研究』(注17)、108頁。内山『紙芝居精義』(注17)、122頁に同様の記述有。
- 26 内山憲堂・野村正二『紙芝居の教育的研究』(注17)、99-103頁
- 27 内山憲尚『紙芝居精義』(注17)、207-223頁
- 28 内山憲堂・野村正二『紙芝居の教育的研究』(注17)、101-102頁。内山『紙芝居精義』(注17)、130頁にも同様の記述有。
- 29 中川正文も「1930年代の中ごろをこえると、幼児教育の場にも教材としてとりいれられるようになった」と述べている(「庶民文化技術の象徴」『月刊絵本』7月号、すばる書房盛光社、1974年、32頁)。
- 30 上地ちづ子は「高橋五山は今井よねの紙芝居活動に刺激されて刊行を開始した」(『児童文化叢書解説編』大空社、1988年、245頁)と記しているが五山は今井の紙芝居を知る前に発行準備にとりかかっている。鬢櫛・種市(注3:2005、57頁)も同様の記述有。
- 31 高橋五山「ででむし」『せいくらべ』2号、(注17)、4頁
- 32 五山の日記に「フレーベル館から円形紙の大量注文がきた」(1960年5月8日)と記述。「フレーベル、かなり私としては適視していた店だが、今は経営も昔のフレーベルではなく凸版印刷などの別経営らしい」(1960年5月17日の日記)とコメント。五山が紙芝居を出版した当時、フレーベルから倉橋の推進する人形と舞台とが販売されていた。
- 33 内山憲堂・野村正二『紙芝居の教育的研究』(注17)、73-79頁
- 34 高橋五山「ででむし」『せいくらべ』1号、紙芝居作家協会、1959年、7頁。五山は東京女子高等師範学校と関わりを持っていた。1930年から1932年まで長男が附属幼稚園に、1936年から1944年まで長女が東京女子高等師範学校に在学していた。在学期間は同窓会、桜蔭会を通じて確認。
- 35 高橋洋子編著『教育紙芝居集成 高橋五山と幼稚園紙芝居』(注16)参照。
- 36 高橋五山「ででむし」『せいくらべ』2号(注17)、3頁
- 37 高橋五山「ででむし」『せいくらべ』1号(注34)、4-5頁
- 38 高橋洋子編著『教育紙芝居集成 高橋五山と幼稚園紙芝居』(注16)、150頁
- 39 「昭和3年、仏教保育協会が結成され、夏期講習会を盛大に開催するなど、仏教関係保育者のみでなく、広く一般の保育者に貢献した」(日本保育学会『日本幼児保育史』第4巻、フレーベル館、1971年、217頁)。昭和4年設立とする資料もある。
- 40 兵庫県の敬愛幼稚園(西光寺小谷超旭氏設立:1922年9月創立、1975年3月閉園)、東京都の井草幼稚園(福島県如来寺の鈴木積善氏設立:1933年創立、現在に至る)など。
- 41 小山貴子「千代田区内の幼稚園・小学校における紙芝居の受容について」千代田区教育委員会『あの日のぼくら』2012年、110頁
- 42 小山貴子(注41)、113頁
- 43 敬愛幼稚園の1938・1939年度「保育日誌」談話の項目に、五山の幼稚園紙芝居「ピーター兔」「三匹の子豚」「とんまなとん熊」「金の魚」「鴨とり権兵衛」「おむすびころりん」「花咲爺」「烏勘兵衛」「赤頭巾ちゃん」などの記述がある。
- 44 幼稚園紙芝居「ふしぎの国アリス物語」は大阪学芸大学附属幼稚園、「七匹の小山羊」は大阪府女子師範学校附属幼稚園で使われていた。幼稚園紙芝居は大阪国際中央図書館国際児童文学館、福岡県立図書館、愛媛県立図書館などにも所蔵されている。
- 45 上地ちづ子『紙芝居の歴史』久山社、1997年、71頁
- 46 『保育問題研究』1巻1号(1937年10月)に会員名掲載。留岡よし子(東京女子高等師範学校を結婚で中退)の義弟は留岡清男。
- 47 高橋五山は留岡よし子に『赤頭巾ちゃん』を貸し出し、子ども達から好評を得たことを報告されて印刷にとりかかった(注34:12頁)。
- 48 拙稿「城戸幡太郎の保育問題研究会における高橋五山の紙芝居の役割」(注2)、29-35頁
- 49 宍戸健夫「戦時下日本の保育理論—城戸幡太郎の場合」『同朋大学論叢』91号、2007年、52頁。附属幼稚園では「七匹の小山羊」(幼児演出)は行われていた(『幼児の教育』36巻12号、1936年、53頁)。
- 50 『保育問題研究』4巻3号、1940年4月、29頁
- 51 松永の保育問題研究会での活動はみられず、1941年7月の『保育問題研究会月報』会員名簿には掲載されていない。途中で退会したと考えられる。

- 
- 52 鬢櫛・種市（注3：2005、58頁）に高橋五山の仕事は「川崎大治に引き継がれた」とあるが、そのような事実はない。
- 53 米村佳樹「日本教育紙芝居協会と幼児紙芝居—その保育研究部の活動を中心に」『幼児教育史研究』第5号、2010年、22頁
- 54 倉橋惣三「人形芝居の話」『幼児の教育』30巻6号、1930年、18-23頁
- 55 菊池ふじの「人形に依る「おはなし」の演出に就て」『幼児の教育』32巻8-9号、1932年9月、43頁
- 56 宍戸健夫は「誘導保育案に吸収されることに力点が置かれ、保育項目の独自の意義について十分検討がされなかった」と指摘している（『日本における保育カリキュラム』新読書社、2017年、71頁）。
- 57 「系統的保育案の実際解説」『幼児の教育』36巻3号～37巻1号（1936年3月～1937年1月）、フレーベル館
- 58 中村悦子『幼年絵雑誌の世界』高文堂出版社、1989年、234頁。『系統的保育案の実際』（1935・1941）序文解説では、ラジオの「幼児への時間」の視聴はしていた。
- 59 鬢櫛・種市（注3）、三澤（注4）
- 60 上遠文子「幼児と紙芝居」『幼児の教育』44巻8号、1944年9月、17-18頁
- 61 拙稿「城戸幡太郎の保育問題研究会における高橋五山の紙芝居の役割」（注2）参照。「アムアム」という台詞があるのは日本教育紙芝居協会の作品『三匹ノコブタ』（川崎大治作・西正世志絵、1943年）。紙芝居『三匹ノコブタ』の出版は五山の『三匹の子豚』の影響がうかがわれる。
- 62 宮内清子「三匹の子豚のこと」『図説翻訳文学総合事典』研究編、大空社、2009年、453-454頁
- 63 日本保育学会『日本幼児保育史』第6巻、フレーベル館、1975年、240-242頁
- 64 文部省『幼稚園教育百年史』（注5）、331-332頁、533-568頁
- 65 内山憲尚「保育要領に於ける「お話」の解釋」『幼児の教育』48巻9号、フレーベル館、1949年9月、7-11頁
- 66 小山祥子「幼児教育史における「おはなし」の受容と変容」『駒沢女子短期大学研究紀要』44号、2011年、9頁
- 67 三木安正・海卓子・山村きよ（1937年10月：1巻1号）、山下俊郎（1938年3月：2巻2号）、副島ハマ（1939年10月：3巻9号）会員名掲載。
- 68 加藤繁美「保育要領の形成過程に関する研究」『保育学研究』54巻1号、日本保育学会、2016年、15頁
- 69 山村きよ「保育要領に示された「劇あそび」の実際について」『幼児の教育』49巻1号、日本幼稚園協会、1950年、20-22頁。
- 70 東京都保育会文化部編集『劇遊び脚本』フレーベル館、1949年。山村きよは東京都保育会文化部長であった。拙稿「高橋五山による「ピーターラビット」の紙芝居化から劇遊びへの展開」『法政大学大学院紀要』第86号、2021年、67頁
- 71 文部省『幼稚園教育百年史』（注5）、634頁
- 72 文部省『幼稚園教育百年史』（注5）、656頁
- 73 内山憲尚「紙芝居の高橋五山」（注20：14頁）で、内山は「全甲社の教育紙芝居はヒットした。毎月1巻位次から次へと幼児向きの紙芝居が発行され、全国の幼稚園、保育所の文化財に新しい途を開いた」と述べており、「全甲社が先鞭をつけた教育紙芝居に於ける成功によって、教育紙芝居の制作者が新らしくできてきた」と指摘している。
- 74 城戸幡太郎『何のための教育か学校か：子どもの幸せと日本の未来のために』情報センター出版局、1980年、148頁